

私の指導法

【第十九回】

柔道 九段

佐藤

宣のぶゆき実践



『柔道は教育である』

柔道は私の神様
柔道の伝道師として
今後も生きていく

長兄に憧れて柔道をはじめた。いつしか柔道では兄よりも強くなったが、兄の存在なくして私は柔道で大成できなかった。

選手、指導者、そして行政者と、3つのことを行ってきたが、指導者としての適性が一番あったように思う。まさに天職だった。今も、道場に行くことが自分のエネルギー源となっている。

柔道に出合ったからこそ、今の私の人生がある。柔道は私にとって神様であり、私の役目は柔道の伝道師である。どうしたならば、さらに柔道が発展していくか、そして社会に活かし、貢献できるかということに常に考えている。

柔道にプロはない。柔道で学んで得たものは必ず社会に活かさなければならぬ。そのための心構えを、私の柔道人生を振り返りながら、柔道をとおして思い、感じ、学んで得たことを述べてみたい。次世代へのメッセージとなれば幸いである。

私の経歴

兄と同じ道を歩む

昭和19年（1944）1月、私は北海道函館市に四人兄妹の三男（兄2人、妹1人）として生まれた。

なかでも4歳年上の長兄・宣紘のぶは勉強も運動もできて、私にとって憧れの存在だった。私はその長兄の影響を強く受けて育ち、幼稚園から大学まで、兄の切り拓いた道、同じ経歴を歩んだ。柔道を始めたのも兄の影響だった。

私が中学校に入った時、兄はすでに高校で柔道部に所属していた。私も中学校で柔道を習いたかったが、学校全体の人数が少なかつたこともあり、柔道部は顧問もなく、ほとんど休部状態だった。仕方なくサッカー部に入ったが、柔道部にも籍を

置いた。しかし、柔道はサッカーができない冬の2カ月間に行うだけだった。そのため、中学時代に柔道の試合に出たことは一度もなかった。サッカーは2年生からレギュラーになったが、柔道が好きで、高校では柔道部に入ると決めていた。

高校は、進学校の北海道立函館中部高等学校に入学した。柔道部に入り、漸く柔道に打ち込める日々となった。兄は東京教育大学（以下、東教大）の2年生になつていた。入学早々、兄と私が立てた目標は、私が北海道のチャンピオンになることだった。

当時、高校の全国大会は団体戦のみで、私が高校に入つてから初めて個人戦が新設された。進学校で柔道部員は少なく、団体優勝は難しかったので、個人戦での優勝を目標に掲げた。

兄との二人三脚 全道チャンピオン

実際、高校時代、柔道はすべて兄から教わつた。柔道部顧問の三沢先生は柔道経験者ではあつたが、稽古を付けてくれる先生ではなかつた（もちろん何かとお世話していただいた）。私は柔道をすべて兄に一人から教わつたのである。

夏と冬に兄が東京から帰る度に、毎日稽古を付けてもらった。そして、課題を与えてもらい、その後は、手紙での遣り取りで質問し、アドバイスを受けた。今から50年も前の話である。電話は郵便局や学校にあるだけだった。もっとも兄が帰るまでの空白期間が、私の成長ぶりを明瞭にさせたようである。

兄も高校から柔道を専門的に始めたが、大学に入つてあまりのレベルの差に愕然がくぜんとしていた。兄の口癖は「俺は出遅れた」であつた。この兄の想いが私に

プロフィール

昭和19年（1944）1月12日生
68歳 北海道出身

昭和37年、函館中部高等学校卒業。昭和41年、東京教育大学（現・筑波大学）体育学部卒業。株式会社博報堂を経て、44年1月、東海大学体育学部教員となり、東海大学柔道部監督に就任。56年〜平成20年、同大学同学部教授。21年〜24年同大学特任教授。現在、同大学名誉教授、同大学柔道部終身主席師範。

その他、全日本柔道連盟理事・副会長、全日本学生柔道連盟会長、JOC理事、国際柔道連盟教育理事などを歴任。
講道館柔道九段。

▼主な戦績

全日本柔道選手権大会優勝1回・準優勝2回・3位2回、世界柔道選手権大会軽重量級優勝2回など入賞多数。

▼主な指導歴

全日本学生優勝大会団体戦、全日本学生体重別優勝大会、全日本団体選抜優勝大会、全日本学生女子優勝大会優勝など多数。世界選手権日本チーム監督、ロス五輪日本チーム監督、アトランタ五輪本部役員、シドニー五輪日本選手団総監督などを歴任。多数の世界チャンピオン、国際的選手を育成。

柔道を徹底して指導してくれた原動力になったと思う。本当に手取り足取り、立技はもちろん、寝技まで指導を受けた。

北海道の冬期は寒く、稽古はたいいて寝技から開始した。そして、兄が東京に出て一番遅れていた分野が寝技だったこともあり、私は寝技の特訓を受けた。それに、体が抜群に柔らかいという私の体質に寝技が合っていた。お蔭で大学に入った時は、誰よりも強くなっていた。兄は指導者として職人的であり、名コーチであったと思う。

また、兄が東京にいる間は、私はよく柔道部の仲間を引き連れて地元の大学や警察、他校な

どへ出稽古に行った。こうした稽古を続けたお蔭で、高校入学当初は白帯であった私が1年の夏には初段を取り、1年の後半には柔道部で最も強くなっていた。そして、3年の時に、目標であった「全道優勝」を成し遂げることができた。それまで自分の実力に半信半疑であったが、この優勝で兄も私も、もっと専門的にやれば、更の上のランクに挑戦できると確信した。

なお、勉強については、私は高校入学当初から兄と同じ東教大を受験すると決めていた。担任の先生にも許してもらい、1年生から東教大の受験科目のみを勉強するという徹底ぶりだった。試験も私だけ別の問題を作っていたのだ。

進学校で、全道優勝を目標に柔道に打ち込み、それを実際に成し遂げた私は、学校でも特殊な存在だったのかも知れない。

東京教育大へ

◎ケガの功名

予定どおり東教大に進学した私は、1年生からレギュラーになった。しかし、最初の合宿で左膝を痛めてしまい、3カ月間、通常の練習ができなくなった。この時、同じようにケガで苦しんだ先輩から、「無理をするな、徹底して治せ」とのアドバイスを受けた。もし、このアドバイスをなければ、私は無理をして、選手として大成できなかったかも知れない。そして以後、「2度と同じケガをしない」というのが、私の鉄則となった。

どんなに気を付けていてもケガをする時はある。しかし、その際、なぜケガをしたのかをよく分析して、しっかりと治して、同じケガを2度とすべきではない。2度同じケガをする者は素質がないのである。私は今まで、大きなケガを3回したが、すべて違う場所である。しっか

り治すことが将来に繋がる。

◎猪熊功先生

東教大柔道部の監督は猪熊功先生であった。猪熊先生は当時現役のチャンピオンで大スターである。猪熊先生から教わったことは、技の指導云々ではなかった。その背中を見ながら、そして、徹底して乱取りで投げられ稽古を付けてもらいなから、勝負師としての心構え、闘魂の柔道を見做った。「こうしろ、ああしろ」ではなく、先生の闘う姿、稽古する姿、トレーニング、ピーキング（試合前の調整）方法など、現役選手としての生活すべてを見て盗み取った。

猪熊先生は、立場は監督であったが、第一に現役の選手であったから、一々学生を育てることとは考えておられなかったと思う。現役選手としての在り方を見て学んだのである。

◎木村光郎先生

大学の3年から4年にかけて、三角締めの名手、同志社高



昭和34年3月、高校入学前、長兄・宣統（右）と

商の木村光郎先生の下へ稽古に行った。当時、三角締めを使う選手はいなかった。1961年のパリ世界選手権大会でヘーシクに日本人が負けてから、寝技の重要性が日本の柔道界で強く言われるようになり、高専柔道が注目を集めて見直されるようになっていた。木村先生は東京オリンピックの強化合宿にも来られて指導されていた。

今まで、何となく寝技の強かった私であったが、木村先生と出会って、寝技の指導理論・指導体系を学んだ。高専柔道ではそれができ上がっていた。もちろん寝技も習ったが、その指導理論を学び、マスターした。

私の得意な引込返もそこから始まった。当時、サンボ出身の外国人選手はよく使っていたのだが、日本人選手は誰も使わなかった。寝技にいくための手段、繋ぎ技で、高専柔道が非常に参考になった。

や、高専柔道の資料を洗い直して、「三角締めの研究」に取り組んだ。そして、その資料を提示していただいたのは博報堂の恩田和也先生（東教大の先輩）だった。

◎全日本柔道選手権大会出場

大学4年の時、初めて全日本選手権大会への出場を果たした。大学に入って兄と立てた目標が大学在学中に全日本に出場することだった。当時の全日本出場は、今以上にグレードが高かった。無差別の全日本で優勝することが柔道の頂点だった。兄の目標も全日本出場だったが、私の方が早く出場を果たした。そして一番の激戦区の東京から出場したことによって、私の大きな自信となった。

教員か実業団か

東教大に来た理由は、柔道をしたかったことはもちろんだが、卒業後は教員になろうと思っていたからである。最初は、4年間柔道を思いっきりやって、卒業したら北海道で教員になろうと思っていた。しかし、全日本に出場したことによって、人生が大きく変わった。柔道で、もう一つ高い山、上のランクへ挑戦する気になった。その時も兄の助言があった。

夏に実家へ帰ると、「全日本で優勝するまでは北海道に帰って来るな、教員はいつでもなれる。高校の先生ではいくら頑張っても全日本で優勝を狙える環境にはならない。東京で徹底して柔道をやりなさい」と言われた。

当時、東教大を卒業すれば、どこへ行っても教員になれた。実際、国体を控えた埼玉県からの要請もあり、後に所属する博報堂からの誘いも一度断って、埼玉県で教員になろうと思っていた。しかし、兄から懇々と説得され、優勝を狙う環境を求め心した。そして、昭和41年（1966）、3年契約で博報堂へ

博報堂での3年間

入社した。今思えば、その当時まだ全日本への出場を果たしていなかった兄の夢も託されたのであろうと思う。

◎恩田和也先生（先輩）

博報堂での3年間の体験は、私を非常に成長させ、今でも大きな財産となっている。普段は午後の3時から4時頃まで仕事をしてから練習に行った。柔道部監督の恩田先生は、大学の先輩でもあり、元は数学の先生だった。柔道が好きで、博報堂柔道部を作った人物である。数学や力学の観点から理論的に技を繋ぎ合わせてみたり、また、試合で暗号を使ってみたりと、その指導法や斬新なアイデアは私には非常に新鮮で面白く、大変な影響を受けた。私自身の現役生活もそうであったが、指導者となつてからも、恩田先生の理論的な発想や指導法を応用した。仕事については、私は教員に

なるための勉強しかしてこなかったため、博報堂が何の会社であるかさえ知らなかった。広告代理店と言われても、業務内容はおろか、会社の仕組みも全く分からない状態だったのである。それを、恩田先生にいろいろはぐのいぐから教えていただいた。

なかでも印象に残っていることは、社会人としての心構えを教わったことである。「3年契約であっても、永久に会社に勤めるつもりで、仕事に当たれ」と言われた。永久に勤めるつもりでいけば、いろいろなことが勉強になると教えられた。そして、「仕事は同期に付いて行け。仕事ぶりで同期に溝を空けられるな。そうすれば、現役生活が終わった時に、お前の人脈が活きてきて、更の上にいける。とにかく付いていけよ」と。この教えのお蔭で仕事や社会人としての大体のノウハウが勉強でき、身に付けることができた。上司からも好かれた。

マムシの宣ちゃん

私の柔道は寝技を中心とした、しつこい柔道である。全日本強化選手であった頃、強化コーチであった神永昭夫先生から、「お前はマムシだ。マムシのと金になれよ」と言われた。「マムシのと金」とは、将棋で歩の駒が敵陣地で成り金(と金)になると、王将でも恐れられる存在となることを意味する。

私の柔道の素質・センスは、強化選手の中では、中の上といったところだった。その中で競い合っている。足りない分は、質・量共に一番の稽古量で補い、総合的に勝つ力を付けていったと自負している。そして柔道は、マムシのごとく、しつこくて相手に嫌われる、食いついたら離さない柔道であったから、囲碁や将棋が好きだった神永先生が、将棋の言葉で表したのである。「マムシのと金になれよ」と。私自身も、自分の柔道、性格と

マッチした好きな言葉だった。

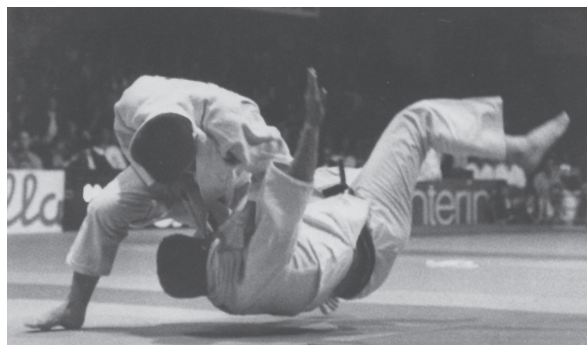
実際、当時は、審判も私が寝技が強いことを知っていて、なかなか試合で「待て」が掛からなかった。全日本で優勝した時の準決勝、遠藤純男選手との試合は8分間の試合で6分半の間、試合をコントロールして寝技を行ったこともある。

それと私の名前は宣実践だが、仲間からは「宣ちゃん」と呼ばれていたもので、それと合わさって「マムシの宣ちゃん」と呼ばれるようになった。

全日本選手権大会 優勝、そして引退

◎全日本選手権大会優勝

昭和42年(1967)4月の全日本では、初めて決勝に進出したが、岡野功選手に敗れて準優勝に終わった。彼は私よりも体が小さかったが、柔道は当時一番強かった。私は自分よりも1ランク上の選手だと認めて、彼を目標にライバルとして稽古



スイス・ローザンヌ世界選手権大会で優勝(1973年)

に励んだ。残念ながら、その後対戦することはなく、試合はその一度しか実現しなかった。

同年8月、アメリカ・ソルトレイクシティでの世界選手権大会は軽重量級で優勝した。しかし当時、ヘーシンクヤルスカなど、個人的に強い外国人選手はいたが、今と違って世界全体のレベルは低かった。日本人選手が同体重の大会で優勝するのは当たり前と思われていた時代だった。1973年6月のスイス。

▶昭和49年全日本選手権大会決勝



ローザンヌでの世界選手権でも優勝したが、私自身、世界で優勝することよりも全日本で優勝することが生涯の目標だった。そして、挑戦し続け、昭和49年（1974）5月5日、8回目の出場で全日本で優勝を果たした。30歳になっていた。現役最後にして思うて臨

▶全日本で初優勝し、天皇賜杯を手にする筆者（昭和49年5月、日本武道館にて）



んだ大会だった。自分でも稽古をしていてピークは過ぎていくと感じていた。これを最後に、現役を止めて指導に懸けようと思ひ、背水の陣で臨んだ大会だった。当日はそれほど調子も良くなく、初戦から一本勝は一つしかなかった。決勝の判定も、主審が相手の二宮和弘選手に間違えて手を挙げてしまうほど、今でいえば2-1の判定だったと思

う。多分に8回の出場で2位が2回、3位が2回、ベスト8が1回の成績を挙げたので、観衆の同情票も審判の同情票も過分に入っていたのだろう。最後という自分の執念も入り交じっていたかも知れない。判定での勝利であったが、会場の皆が拍手してくれた。生涯で一番思い出に残る一戦となった。私にとって全日本のタイトルは現役時代、最大の勲章である。

そしてこの大会は、兄・宣紘が選手宣誓し、私の東海大での最初の弟子、白瀬英春君が初出場した思い出の多い大会でもあった。

◎現役引退、引き際を知る

翌年、31歳で現役を引退した。全日本への出場権もあり、世界選手権も控えていたが、全日本優勝後は闘志が湧かなかつた。稽古へ打ち込むこともできず、練習量も減った。前年、死ぬ気で体力的にギリギリまで自分を追い込んで、漸く登り詰めた頂点だった。満足感よりも力尽きたのかも知れない。

そして、全日本には出場したが、高木長之助選手に敗れるべくして敗れた。その時、猪熊先生から、「佐藤、横綱になったのだから引き際が大切だぞ」と言われた。私も納得し現役引退を決意した。

話は少し戻るが、昭和44年（1969）年1月に、25歳で博報堂を退社し、東海大学体育学部の教員となり、柔道部の監督に

就任していた。30歳の春に全日本で優勝し、その年の夏に高校2年生の山下泰裕君やましたのりひろが我が家に来てきた。次第に選手として

より、指導者としての情熱がより強く傾いていったこともあったのかも知れないと思う。

私の指導法

東海大学柔道部

◎日本一を目指す

昭和44年（1969）、博報堂での3年契約を終えて、東海大の教員となり、柔道部監督となった。そして、私自身が全日本で優勝すること、東海大学柔道部を日本一にすることを目標に掲げた。東海大には1年前に猪熊先生に誘われ、その時に、「日本一の柔道部を作れよ」と言われた。松前重義まつまへしげよし東海大学総長の願いでもあった。

実際のところ、指導には自信があった。というのも、博報堂での3年間に、母校・東教大の監督も任されていたが、監督3

年目に、学生に徹底して寝技を指導して、とにかく負けないチーム作りをして、優勝候補の拓殖大学を破った経験があったからである。

しかしながら、当初の東海大柔道部は、全日本学生大会に出場したこともなく、部員は工学部中心で、武道学科の学生も一期生の11名のみであった。私が監督に就任早々、「日本一を目指す」と言うと、学生たちは皆、ポカーンとしていたのを覚えている。

◎絶対の練習量

学生たちに、「日本一は、君たちの代では無理でもその基礎を一緒に作ってくれ。その基礎とは、絶対の練習量、日本一の



昭和54年、東海大学武道館柔道場にて（左から、筆者、松前総長、猪熊先生、山下）

練習量だ。何か値打ちのあるものを持たないと、日本一にはなれない。まずは練習量からだ」と言った。今考えてもきつかったと思う。私自身が全日本を獲得するための稽古しており、それ

に合わせた練習量だった。当時、私は若くて、大学紛争などで授業がなかったこともあるが、学生を引き連れて、警視庁、講道館、明治大などへ、強い相手を求め、よく出稽古にも出かけた。



第26回全日本学生柔道優勝大会で初優勝（昭和52年6月、日本武道館）

◎監督の仕事

東海大学柔道部は、プロの球団にたとえれば、松前総長が球団オーナー、猪熊先生が球団社長、私は現場の監督といった構図である。そして監督は職人ではなく、コーディネーターであると思う。

先にも述べたが、猪熊先生に学んだことは、勝負師的なところであった。東教大の学生時代もそうであったが、私に欠けていた部分である。私は教育者としての道を学んでいたが、勝負師としては未熟だった。教育と勝負は別の世界である。監督として、勝負師としてのドロドロした部分も必要であった。きれいごとでは済まないことが監督の仕事としてあることを学んだ。

◎監督時代の実績

昭和51年（1976）、32歳の時、全日本学生柔道優勝大会で準優勝し、33歳で初優勝を遂げた。それから4連覇し、翌年は3位で、更にまた3連覇

と、昭和60年（1985）、40歳で監督から総監督になるまでの間、7回の全国優勝を果たすことができた。特に、山下泰裕の存在は大きかった。山下は高校2年のインターハイが終わりから大学3年の夏までの4年間、私の家で寝食を共にした。

山下が大学1年の時、東京都大会で初優勝し、全国大会も決勝まで進んで中央大と対戦した。しかし、勝ったのは山下だけでは、2-1で負けた。優勝するには山下以外のポイントゲッターが必要であると思い、日本で柔道することを希望していたユーゴスラビアのコバセビッチ選手を東海大に留学させ、翌年は山下との2本柱で臨み、初優勝を果たした。教育的な配慮から逸脱しているという批判もあった。しかし、初優勝を狙うには、時としてこのような方法も必要である。高校2年生の山下を転校させた時もマスコミを敵にまわしたが、私は指導者生命を懸けていたのである。

◎山下泰裕の功績

山下は、東海大学柔道部にとつて、非常に大きな影響力を持つ存在である。彼は戦後最大のスターであり、強さの上で、前人未到の大記録を作った選手であることも一つだが、それ以上に、その後の人生において、社会人として立派に育つていったことが大きな要因である。

そして、山下の隠れた功績は、

彼がいることによって私の理想とする柔道部、指導法が完成されていったことである。

私が東海大に来た時は、まだ鉄拳制裁の悪習が残っていた。先輩が後輩に難癖を付けては説教をして殴っていた。私は殴らない監督だった。「なぜ最高学府の人間が殴らなければ分らないのか、それは寂しいことだ、言つて分かる人間に育つてほしい」と、鉄拳



19歳で全日本初優勝を遂げた山下泰裕四段（昭和52年4月）

制裁を止めさせ、消していった。しかし、消し切れなかった。そこへ山下が入部して来て、鉄拳制裁がすべてなくなったのである。1年生ながら誰よりも強く、私の家にいたの、先輩も山下の前でのル

ール違反はできなかった。山下がいない間に殴られた者もいたようだが、山下が上級生になるに従い、すべてなくなつていった。現在の東海大学柔道部のムードを作り上げたのである。いかに指導者一人には限界があるかと思ひ知つた。私の理想とする柔道部の姿に彼が変えてくれた。指導者は決して自惚れてはいけない。

◎内助の功

結婚生活32年、平成12年（2000）に妻・久美が先立った。やはり東海大学柔道部を築き上げていく上での、私にとって大きな支えであった。山下を家族のように面倒見てくれたことが軸となり、特に初期の頃は学生たちの面倒をよく見てくれた。家で食事をよくした。学生たちと寝食を共にしたことによつて師弟関係が育まれていったと思う。2人の子供の世話も妻に任せつきりで、内助の功なしには、私の東海大学柔道部での活動は有り得なかつた。一人の力

には限界がある。亡き妻にとても感謝している。

◎組織力を活かす

私は組織の力を最大限に活用した指導者である。最初は自分一人でもできると思つたが、いくら頑張つても一人の力には限界があると、監督をはじめ3年目で感じた。そして、いかに多くの力を巻き込むかを考えるようになった。

当時、スカウトしても良い選手は皆、名門校に行つてしまつた。全国制覇するためには、練習方法だけでは勝てない、駒が揃わなければ勝てないと実感した。そして、取り組んだのが附属高校の強化であった。高校から大学まで、7年間の一貫教育体制の確立である。この組織力によつて東海大は強くなった。この東海大の組織を上げた強化策は、第一に、柔道専門の枠で鍛えた教え子を附属校に送り、そして第二に、柔道専門の保健体育科教員の枠は限られてるので、複数科目の教員免許

を取らせた教え子を附属校に配
置させ、柔道部の指導者を二人
体制としたのである。今では全
国の附属校に教え子がいる。

◎組織のために

現在、全日本柔道連盟と全日
本学生柔道連盟などで行政をす
る立場だが、弱かった東海大学
柔道部を強く築き上げたことが
基本となっている。JOC（日
本オリンピック委員会）でもI
JF（国際柔道連盟）でも手法
は一緒である。基本の手法をア
レンジしているだけである。

一人の力には限界がある。多
くの力をどう結集するか。その
ためには、何を第一優先にする
かを考えるべきである。どうす
ればその組織がグレードアップ
するかを考える。例えば、とも
すれば古今東西、ポスト争いが
絶えない。解決策は期限を決め
ることである。全柔連で初代ヘ
ッドコーチを務めたが、8年以
上はそのポストに就かなかつ
た。8年以上したらその組織を
駄目にしてしまう。1期4年、

4年では仕事が仕切れないが2
期8年で充分である。

社会人として

○会社勤めの勧め

博報堂での3年間で、仕事や
社会人としてノウハウを身に付
けたことを先に述べたが、その
中でも、特に、何事も「比較対
照する、比較検討する」という
考え方が養われた。この私自身
の経験から、学生たちにも、幅
広い視野が養え、良い教員にな
るためにも、会社勤め等で2、
3年働くことを勧めている。大
学卒業後、22、23歳でいきなり
教員になったならば、ただの若
者が、周りから先生と呼ばれ続
けるうちに、狭い見識のまま、
先生面づらになってしまふからであ
る。広い見識で物事を多角的に
比較対照して考えられなければ
、大きな仕事はできない。

◎平均を取ること

私が恩田先生に言われた「同
期に付いていけ」という言葉を

活かし、学生たちには、「柔道
はこれだけやっていけるのだか
ら、勉強は平均だけは取れよ」
と言っている。平均とは、自力
で単位を取得して卒業すること
である。つまりは、文武両道
ということだが、両方一番には、
中々なれないものであるから、
平均を取るように言っている。

◎四十の手習い

今、私は書道を習っている。
3年間で初段になった。三段を
目指している。博報堂の頃、恩
田先生と「四十の手習い」につ
いて話したことがある。昔は、
人生50年、40歳から習い事をし
ても大してものにはならないと
いう意味と、成功した人がその
くらいの年齢になると頭を下げ
る機会がなくなるので、習い事
をすることによって師匠に頭を
下げる機会ができれば、傲慢に
ならなくなるという意味。つま
り、謙虚になるということであ
る。だからいつか、何か習い事
をしなさいと恩田先生に言われ
たのである。今、実践している。

指導者として

◎基礎学力の大切さ

低学年の指導者に常によく言
うことは、子供たちに基礎学力
の大切さを教えるということであ
る。基礎学力というものは、
低学年においてしっかりやらな
ければならない。なぜなら柔道
にプロはないからである。柔道
で得たものを社会に活かしてい
けるようになるには、基礎学力
が必要であるからである。知識
がなければ活かしていけない
力が必要ならば活かしていきな
くなる。

◎「力必達」と「尽己」

柔道の日々の稽古や試合の中
で、様々なことを学ぶことがで
きる。その中でも次の2つは骨
身に染み込んでいる。柔道で得
たものを社会で活かすために必
要な心構え、覚悟である。

一、「力必達」……努めれば必

ず達することができる。目標
を持って挑戦し、諦めずに努

力すれば、必ず達成することができる。

一、「尽己」……己を尽くす。

目標を達成することができなくとも、自分自身のできることはすべて出し切る。そうすれば納得できる。

「力必達」から「尽己」への境地は、私の人生そのものである。

◎柔道の教育的価値を広める

柔道は教育である。柔道をよりグレードアップしていくためには、柔道は教育的価値が高いということを経世の中に理解してもらわなければならない。それにはやはり、職業に貴賤はないが、知識階級に多くの理解者を得る必要がある。嘉納治五郎先生の手法は、まさにそうであった。嘉納先生は、勝海舟をはじめ、明治時代のトップの人たちに理解され、可愛がられた。だからこそ今日の柔道がある。知識階級の中に、多くの柔道ファンを持たなければ、組織は栄えていかない。

柔道が、日本は元より世界で

更に発展していくためには、教育的価値の高さを謳い文句に、自ら勉強し、知識を高めて、実践していかなければならない。

私はその最たる例が、現在、東海大学副学長の山下泰裕の活動であると思う。私は、山下や井上康生などに技はもちろん教えたが、勉強の大切さ、面白さを徹底的に指導した。山下は戦後最大のスターとも言える逸材であるが、柔道だけでは、ここまでこれなかったと思う。勉強を続けていたからこそである。

最近では、東海大附属高校の合宿では、必ず夜2時間、勉強会を組むように指示している。

中学校武道必修化と指導者養成

◎武道の良さを広める機会

本年(2012)4月から始めた中学校授業での武道必修化は、たとえ授業時間が短いとはいえ、皆に日本の文化である

武道を教える機会が得られたのであるから、武道の良さを広められる大きなチャンスである。そのためにも、まず指導者は更に本を読み、勉強していただきたい。

◎教員採用と指導者養成

教員採用に当たって、武道関係者からよく、「武道の専門家をもっと多く採用してほしい」という声上がるが、私は、武道だけ、保健体育の免許だけではなく、国語や社会など、ほか複数の免許を取得して採用されてほしいと思う。もちろん、どの都道府県でも武道の専門枠は持つていただきたいが、複数科目の免許取得者であったり、元青年海外協力隊員であったりと、何かしらの条件を加えてグレードを高くしてほしいのである。より勉強した者が採用される仕組みを作っていたきたいと思うのである。

なぜなら、指導者によつて武道の評価が変わってくるからである。よく柔道は事故が起こり

やすく危ないと報道されるが、私は事故が起こるのも防げるのもすべて指導者次第であると思つている。指導者の資質を向上させていくためにはどうすべきかを考えていただきたい。

柔道界では、現在、全柔連で「指導者ライセンス制度」を開始した。このライセンス制度をもっと高めていってほしいと思う。今までは、ほかの武道もそうかも知れないが、すべて段位で片付けてきた。段位で判断してきた。しかし、段位は指導者としての一部分に過ぎない。よりグレードの高い指導者とはどういうものか、どう養成するかを考え、ライセンス制度など、現在の指導者が更に勉強する仕組みを作つて資質向上を図り、また、指導者採用のハードルを高くすることも必要であると考ええる。ハードルが高過ぎるとの声もあるかも知れないが、決してそのようなことはない。私には「何事も平均は取れる」という考えがあるが、実体験から、

保健体育科の免許だけでは勉強が足りないと思う。複数科目の

教員免許取得を奨励したい。

私から伝えたいこと

世界平和活動

柔道は教育であり、私にとつての神様である。柔道に出合ったからこそ、今の私の人生があ

る。私の役目は柔道の伝道師である。どうしたならば、さらに柔道が発展していくか、ということに常に考えている。そして、柔道は世界的に普及したことにより、柔道を通して国と国、世界の架け橋になれるのである。つまり、柔道をとおりて世界の平和活動に貢献できるということである。これは松前重義先生の考えでもある。嘉納治五郎先生の考えにも繋がっていく。

現役選手へ

いろいろな縁で結び付いた柔道との出会いである。思いきつてやってほしい。しかし、柔道にプロはない。プロはないが、質・量共にプロ的な練習をしなければ、世界で勝つことはできない。しかしながら、野球やサッカーと違い、それだけで多額のお金を得ることはできない。それがまた柔道の良さでもある。柔道を通して得た体力的なもの、精神的なもの、それを社会人としてどう活かしていくか、そのことを常に考えていくてほしい。



教え子の井上康生東海大学柔道部副監督と(平成24年5月、東海大学武道館柔道場)

私は嘉納先生や松前先生の足下にも及ばないが、柔道だけは強かった。私は柔道に世話になった人間である。これからも伝道師として生きていきたいと思っている。

そのためにも、やはり、勉強するという姿勢を崩してはならない。常に新聞などのニュースに目を通し、時代の流れを読んで把握してほしい。低年齢の指導になるほど、基礎学力の大切さ、勉強の面白さを教えてあげてほしい。そういう良き指導者になってほしい。